

【使徒書日課】ヘブライ人への手紙 9章11～22節

11けれども、キリストは、既に実現している恵みの大祭司としておいでになったのですから、人間の手で造られたのではない、すなわち、この世のものではない、更に大きく、更に完全な幕屋を通り、<sup>12</sup>雄山羊と若い雄牛の血によらないで、御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです。<sup>13</sup>なぜなら、もし、雄山羊と雄牛の血、また雌牛の灰が、汚れた者たちに振りかけられて、彼らを聖なる者とし、その身を清めるならば、<sup>14</sup>まして、永遠の“霊”によって、御自身をきずのないものとして神に献げられたキリストの血は、わたしたちの良心を死んだ業から清めて、生ける神を礼拝するようにさせないでしょうか。

<sup>15</sup>こういうわけで、キリストは新しい契約の仲介者なのです。それは、最初の契約の下で犯された罪の贖いとして、キリストが死んでくださったので、召された者たちが、既に約束されている永遠の財産を受け継ぐためにほかなりません。<sup>16</sup>遺言の場合には、遺言者が死んだという証明が必要です。<sup>17</sup>遺言は人が死んで初めて有効になるのであって、遺言者が生きている間は効力がありません。<sup>18</sup>だから、最初の契約もまた、血が流されずに成立したではありません。<sup>19</sup>というのは、モーセが律法に従ってすべての掟を民全体に告げるとき、水や緋色の羊毛やヒソブと共に若い雄牛と雄山羊の血を取って、契約の書自体と民全体とに振りかけ、<sup>20</sup>「これは、神があなたがたに対して定められた契約の血である」と言ったからです。<sup>21</sup>また彼は、幕屋と礼拝のために用いるあらゆる器具にも同様に血を振りかけました。<sup>22</sup>こうして、ほとんどすべてのものが、律法に従って血で清められており、血を流すことなしには罪の赦しはありえないのです。

説教「生きた神を礼拝するために」

説教者 吉岡優介 神学生（東京神学大学）

### 吉岡優介神学生プロフィール

1987年、クリスチャンの両親の下に生まれる。

日本基督教団代田教会で幼少期を過ごす、徐々に教会から離れる。

公立の小、中、高を経て、大学でスポーツ科学を学ぶ。

卒業後、一念発起し、お笑い芸人を志す。

4年間活動の後、挫折。絶望の中、再び教会に招かれ、信仰を与えられる。

2015年12月21日、代田教会平野克己牧師の執行により洗礼を受ける。

2016年4月よりキリスト新聞社入社。

2022年、献身の志を与えられ、同社退職。4月、東京神学大学に入学。

2024年4月、日本基督教団高幡教会に転会。

現在、東京神学大学博士課程前期1年。専攻は実践神学（説教）。

学生キリスト教友愛会（SCF）学生主事。